

「1960～70年代の沖縄ロックと日本」

笹原 亮二

(ささはら りょうじ)

国立民族学博物館

沖縄には現在、在日米軍基地の約75%が集中している。1972年沖縄が米国の支配から日本に返還された後も、未だ多くの私有地が軍用地とされたままで返還の目処すら立っていない。加えて、米兵による女性への暴行や放火なども後を絶たず、地位協定の抜本的な改訂も行われず、沖縄の人々は米軍基地によって大変な苦勞を強いられてきた。

しかし、沖縄に基地がある限り、沖縄の人々は基地の存在という現実と何らかのかたちで関係を持ちつつ暮らしていかざるを得ない。基地は沖縄の人々の職場となった。基地の周囲にはそこで働く人々や、基地の米兵相手に商売を行う人々が集まり、町ができた。そして、基地の存在は、沖縄の音楽にも様々な影響を与えることになった。

1960年代後半ベトナム戦争が激化し、B-52が嘉手納基地から連日北爆に向かうようになると、コザ(現沖縄市)や金武は米兵で溢れかえり、バーや風俗店でドル札を湯水の如く蕩尽し、そうした店では沖縄の若者たちが、米兵を相手に音楽を演奏するようになった。戦場行きを前に、明日をも知れぬ境遇に荒んだ若い米兵たちから、演奏中にビール瓶や灰皿を投げられたり喧嘩を吹っ掛けられたりする中で、彼らは演奏の腕を磨き、それまで沖縄には見られなかったロックという音楽を生み出していった。

1970年代に入り、沖縄が日本に返還されると、沖縄のロックは、米兵相手に鍛えられた「日本離れ」のパワフルな演奏ということで注目を浴びるようになった。日本の大手レコード会社からデビューを果たし、国内各地で精力的にライブ活動を行い、日本のロック界において一躍トップに登りつめるバンドも現れた。しかし、数年間の活動の後、彼らは結局沖縄に戻ってしまう。そして、沖縄で演奏活動を続けて現在に至っている。

こうした1960～70年代の沖縄のロックの動向を、日本との関係、特に日本での活動を通じた沖縄のロック・ミュージシャンの意識の変化に注目しながら考えてみたい。